
Alice of Black Blood

黒猫時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A l i c e o f B l a c k B l o o d

【Nコード】

N 2 7 3 6 Y

【作者名】

黒猫時計

【あらすじ】

黒崎亜莉栖はゲーム好きな女子高生。その日も今日こそはクリアしようと思気込み、テレビの前で勤しんでいた。努力の甲斐あってか、話題のホラー『アリス・イン・デスゲーム』を、徹夜の末クリアする。しかしそこに表示されたのはコンティニュー画面だった。疑問に思いながらもイエスを選択し――。

異形と戦う異世界トリップもの。

残酷表現および流血描写など多数出てきますので、苦手な方はご

注意くださいませ。

暗がりな空間の中、仄かな明かりがちらつきを見せる。

それは黄色であったり赤であったり、青であったりした。

時折目も眩むような閃光を発し、暗転してはまた光り、それを幾度も繰り返す。

様々な色の光を生み出す万華鏡。文明の利器である液晶テレビには、目まぐるしく忙しく動き回る二人の人間。どちらもその容姿から女性だと窺える。

その前には、それらに被さるようにして一つのシルエットが輪郭を浮かばせる。

同時に音も聞こえた。

金属を打ち鳴らすような音、そして悲鳴と呻き声、何かが倒れる音、爆発音。次から次へと畳み掛けるように連なる音に混じり、力チャカチャという奇怪な音も連続して聞こえてくる。

そんな昏い部屋に浮かび上がるのは、数々のぬいぐるみや人形だ。猫であったり、帽子であったり、ウサギであったり。溢れかえる愛らしくデフォルメされたものの中には、口端を吊り上げ嗤う不気味なものもいて。場の雰囲気と相まって、壊れた遊園地の如く狂気じみていた。

——突如、

『ギャアアアア——！！』

一際甲高い断末魔の叫びとともに風切り音が鳴り響く。室内は一瞬、赤い光に包まれた。

と同時に、

「よっしやー！！ アリス倒した！」

声量を抑え、歓喜に震える拳を握るのは一人の少女。右手には黒いコントローラーが握られている。

発光の明滅を繰り返していたディスプレイは、上から垂れる血の表現からやがてエンディングを経て、エンドロールへ。真つ黒の画面に音楽と白文字が流れていく。

懐中時計にも似た壁掛け時計が指す時刻は現在、深夜二時三十分を回ったところだ。

「ふうー、ようやくクリア出来た。けっこう難しかったなー、『アリス・イン・デスゲーム』。アリスってばチヨー強いし」

その苦労が滲む渋い顔をしながらも、おもむろに手にしたパッケージ。

表紙には真紅のドレスに身を包んだ鎌を持つ妖艶な美女と、血まみれの白ウサギ。そしてナイフ片手にいかにもな悪役面した少女の顔が描かれている。

裏表紙にはでかでかと「アリスを倒せ！ 殺せ！ 首を刳れ！」となんとも物騒な言葉が、これまたナイフ片手に怯える「アリス」らしき少女の絵とともに謳われていた。

C E R O Z。十八歳以上対象のホラーアクションRPGだ。

最近流行の据え置き機のソフトで、「不思議の国のアリス」を題材としている。

登場人物名程度しか踏襲されておらず、内容は狂気に囚われた赤の女王が、アリスの首を狙い次々に邪魔者を殺戮していくというものだ。その邪魔者の中には、時に味方も含まれる。

高校生の間でも少なからず話題となっており、海外からもその難しさとグロテスクさ、奇抜さから賛否は分かれるが、多少の評価はされている作品だ。

「——にしても……、アリスを殺すのが目的のゲームって……。確かに斬新だと思うけど、ちょっと気が引けるな……。なんせ同名だし……」

下から上へと流れていく画面の文字をボウと見つめながら、少女、黒崎亜莉栖は頬を掻く。

流れるエンディングテーマも、その内容と相まってかクリアを祝うような楽しいものでは決してない。

ピアノの旋律は単調の悲しい曲だった。時折聞こえるオルゴールの不協和音が、余計に陰鬱な気分させる。

「でも、苦節一ヶ月半……。学校ある日もない日も、徹夜で頑張った甲斐があつたよ。ほかのゲームに浮気もしなかったしね！」

一人しかない部屋の中、亜莉栖は誰に言うでもなく、まるで自分を褒め称えるかのように何度も頷きを繰り返す。

気付けば、エンドロールは終わりを迎えようとしていた。

最後の文字、エグゼクティブプロデューサーの名が流れていき、制作会社のロゴが表示され——、

「……ん？」

暗転した画面に表示された文字に、亜莉栖はつい目を睜り前のめる。

「あれ、なんで？」

顔に疑問符を浮かべながら画面に向かって問いかける。
何故なら、テレビの液晶には——、

Continue? ——— 【Yes】 or 【No】と
表示されていたからだ。

「クリアしたのにコンティニュー？ 普通、FindとかThe Endとかじゃないの？」

しばらくの間呆然と見つめていた亜莉栖だったが、画面が切り替わる様子もないことを確認すると、おもむろにカーソルを【Yes】へと合わせた。試しにキャンセルボタンを押しても、なにも反応はない。

ついでにスタートボタンも押してみる。しかしおかしいことにセーブ画面すら表示されない。

小首を傾げ訝しがりながらも、亜莉栖は隠し要素でもあるのかと考え、意を決してコントローラーの決定ボタンを押した。
すると――、

『キャハハハハハ！！』

「ッ？！ な、なに……」

途端に聞こえた音にビクつき身を強張らせる亜莉栖。それは設定した音量よりも遥かに大きく響いた。

女の嗤う声に次ぎ、嘲笑する低い男の声が混じると再び画面は音もなく暗転し……それは突然に起こった。

——ブウウン。

と微かな照明となっていたテレビは電源が勝手に落ち、光を失った室内が闇に染まると同時であった。

亜莉栖の視界がぐにやりと歪む。

今までに見たことのない光景。それは確かに眼に視えた。

空間が、まるで雑巾でも絞ったかのような動きでうねり、螺旋を描きながら回転しているような錯覚に陥る。

「うつ……きもち、悪い……」

それに伴い、鮮やかなまでに強烈に叩き込まれた不快感。

激しい立ち眩みのような、乗り物酔いにも似た感覚は、亜莉栖の思考を麻痺させた。口元を手で押さえ、胃の内容物の逆流を抑え込むかのように必死で嘔吐くのを我慢する。

世界がグルグルと回転し朦朧とする意識の中、伸ばした手が触れたもの……。

幽かに残る意識の欠片が最後に見たものは、ベッドの上の、白い……嗤う、ウサギのぬいぐるみだった——。

01—黒いうさは変態男？

混濁する意識の中、微かに聞こえた水のせせらぎ。

聴覚に次いで感じた鼻をつく香りは、緑の青臭さと少し、土臭かった。

「う……ん……」

まるで意識を誰かに持ち上げられるかのように、少女、黒崎亜莉栖は目を覚ます。

重い瞼に隠れていた墨色をした瞳が、朧気ながらに世界を映し出すと、同時に意識の覚醒が始まった。

……妙に体が重い。体重、少し増えたかな？

そんな他愛もないことを考えながらも上体をゆつくりと起こした。そして焦点定まらぬ眼のま^{まなこ}ま、ぐるりと辺りを見渡す。

「——いつツ?!」

知らぬ間に頭でもぶつけたのだろうか。顔を顰めながらこめかみに手を当てると、まるで古いテレビのようにザラザラとチラつく視界を払拭するように軽く頭を振った。

「……ここは——?」

ぼやける視界はやがて正常を取り戻し、改めて見る自分の周囲はどこを見渡しても木、木、木。

満ち溢れるマイナスイオンと、肺を一杯に満たす緑の匂いだが、ここが森の中だということを自覚させる。

目覚めの前にも聞こえた水音に振り返ると、背後には滾々と湧き

出る清らかな泉。そしてその周囲には、水差しで水を注ぐかのよう
に、優しく流れ落ちる幾筋もの滝。

あまり大きくはないが、水面が煌くその様は、場の雰囲気と相ま
って自然の神秘さを湛えていた。

気怠そうに天を仰ぎ見た亜莉栖は、木々の合間から微かに漏れる
光のシャワーに目を細める。

まさに夢見心地。

甘く響く穏やかな自然のコンチェルトは、亜莉栖を再び眠りの中
へと誘おうとしていた。

安らかなひと時への誘惑に身を委ねようと目を閉じて……しかし
数瞬の後、亜莉栖はあることに気づく。

「——てか、ここどこっ!？」

目を睜り、自らに起こった現象の把握に努めようとするが、未だ
に思考が追いついてこない。

神秘的過ぎる場の空気に、夢か現かも判らないほど毒された脳で
は、判断出来るはずもなかった。

呆然とただ目の前に広がる景色を眺めていると——ガサツと
木の葉を踏みしめる音。次いで木立の影からヌツと黒い影が姿を現
す。

「だ、誰……?!」

明らかに緊張と警戒を含んだ声を投げかけながら、衣服が汚れる
ことも厭わずに、亜莉栖は泉の方へと後退る。

一步一步近づいてくる不審な影に、引き攣った顔をして動向を目
で追っていると、影は木洩れ日の下までやってきてその黒い姿を映
し出す。

それを見た瞬間、亜莉栖の動きが一瞬止まった。

唖然とした顔で見つめる先、その人物の頭からつま先まで何度も往復する亜莉栖の黒瞳。

そして――、

「へ、へ、変態がいるっ!？」

「誰が変態だ!」

驚愕した声に、間断なく返ってきたハスキーボイス。

それはまるで火をつけたグラスに垂らす、ブランデーのように甘く薫るほど脳を浸潤する響きだった。

しかし亜莉栖はそんなことも気に留めぬまま瞠目する。

中心線よりやや右後ろで縛った、肩口まである艶やかな黒髪。鮮やか過ぎる深い蒼をしたその瞳。亜莉栖より十センチは高い身長を包むのは、どこかのお屋敷に従事する執事のような燕尾の礼服。

まるで漫画やアニメ、ゲームの世界からそのまま引っ張ってきたかのような美青年だった。

黒髪碧眼をした中性的顔立ちの青年は、目つき鋭いままに呆れたようなため息を漏らすと、そのまま樹木に背もたれた。

「お前は、“アリス”か？」

「へ……?」

一瞬、亜莉栖の思考がフリーズする。

普段なら、セーブすらせず進めた末に、途中でゲームがフリーズしようものなら、暴れ馬の如く暴れるのだが……。どうやら今の状況では、亜莉栖の暴走は起きないようだ。

それもそのはず。

名乗ったことのない、ましてや会ったこともない赤の他人に、自分の名前を言い当てられたのだ。

亜莉栖の男に対する不信感は、リミットゲージをさらに高めた。

「い、いえ……ち、違い、ます……わよ？」

ド緊張のあまり声が裏返る。

（……そうよ。ここで返事しようものなら、絶対喰われちゃう！
だってあんな目してるんだもん！ 断固拒否！ なんと少しでも誤
魔化しないと……。それに、見知らぬ人に名前を教えちゃダメだっ
て、保育園の時に母さんも保育師さんも隣のおばあちゃんも飼っ
てた猫にも言われたもんね！）

悟られぬようにした頷きの後、男から目を逸らし、一回りほど縮
めるつもりで体を恐縮させる亜莉栖。

男は睨むような視線を崩さずにジッと少女を見つめている。

（こ、これは……ッ！？ 案の定わたしの危険アンテナが注意（C
aution）から警告（Warning）レベルへ引き上げて警
報鳴らし始めてるわ！）

恐々とした様子でチラリと男を見やる亜莉栖。

視線が交差するや否や、光の速さで顔を背けた。

（に、睨んでる、睨んでるよ……。な、なんで？ わたし、なん
かしたかな……？）

「もう一度問おう……。お前は、“アリス”かと聞いている」

再び訊ねる男の声には、明らかに苛立ちが見て取れるほどの怒気
を孕んでいた。

それに恐れをなした亜莉栖は、無言のまま首を左右に強く振った。

——しばらくの沈黙。

男の出方も分らない。

ただ空白な時が流れることに、先に耐え切れなくなったのは亜莉栖の方だった。

「あーもう、まったく！ あんたしつこいのよ！ わたしは亜莉栖よ！ 文句でもあるの！！ 分かったならとつとどっかに消えー

ー」

「やはりそうか。……いや、聞かなくても解つてたことだな。なぜなら——」

「ヒイイー！！」

「ん？ 煩い女だ……なんだ？」

「あんた、も、もしかしてストーカー？！」

「人聞きの悪いことを言うな。まあ、お前をストーキングするやつらは他にいるけどな」

亜莉栖はその一言で再び硬直した。

震える声で問いかける。

「ま、まさか、人攫い……？」

「ああ？ つくづく失礼なやつだ。撃ち殺すぞ」

言いながら懷に手を入れた青年は、鈍い光を反射する黒い物体を引き抜いた。

それは亜莉栖もよく見知っている形だった。見知っているといっても、実際に見たことはない。

青年が手に持つそれはゲームにも頻繁に登場する、現代の火器、拳銃だ。しかも回転式弾倉を持つ、回転式拳銃タイプだった。

「そ、そんなもの取り出して、一体、ナニする気……？ ま、まさか、それでわたしを脅して犯そうとか思ってるんじゃないでしょうね？！」

「バツ……。オレは女なんぞに興味はないんだ、そんなことするか！」

「やつぱり！ あんた真性の変態じゃない！」

「だれが変態だ、誰が——」

「それよ！」

反論など許さない！ と言わんばかりに、亜莉栖は男の頭上をビシッと指した。

先にも発した罵りの言葉。それはそこに“あるもの”を指してのことだったのだ。

慇懃な執事然とした風体の青年にはまるで似つかわしくない——
—— 似合っていないという意味では決してない—— カジノや怪しいお店、はたまたコスプレでしか使われないようなものに乗っている。

その黒髪と同じ色をしたふわふわの毛で出来たもの。銀のトレイ持つ女性をイメージする二葉のカランコエ。

男がするにはいささか勇気がいりそうな、けれど青年はごく自然に、まるで生えているかのように身に着けるそれは、黒いうさぎの耳だった。

「こいつのどこが“変態”なんだ」

「どう考えても、男がするのはおかしいでしょー？！ そんな恥ずかしいもの女だって進んで身に着けやしないわよ！」

「いちいち煩い女だな。しょうがないだろ。オレは“黒うさぎ”なんだから」

「へ？ 黒、うさぎ……」

「ああ。見れば解るだろ、アリスなんだから」

(……一体なに言ってるのかしらコイツ。ていうか、なに初対面の男とこんなに楽しそうに話してるわけ自分？　そもそも夢でしょ、これ？　ならさっさと目を覚まし……って、あれ——？)

亜莉栖はようやくおかしなことに気づく。そう、これは夢のはず。でも耳に聞こえるこの水のせせらぎ、樹葉のざわめき。この上ないリアルティを伴って感じる音、土の感触、森の匂い。そして男の艶やかなまでの立ち姿と声。

あちらの世界にでも旅立ったかのように再び呆然とする亜莉栖を、男は訝しがりながら見つめている。

「なんだ、現実逃避でもしてるのか？　無駄だと思うがね」

視界にチラつく男の姿。なにやら呆れたように肩を竦めているようだった。

「ねえ」

「ん、なんだ」

「それって……本物？」

呆けたまま、視線は再びうさぎ耳に釘付けになる。

そんなことしか考えられないほど、今の亜莉栖はだいぶキテいるようだった。

「えっ?!　いや、まあ、その、なんだ。本物に近い……本物だ」「取れるの？」

「——取れん！　断じて取れん。黒うさぎの耳が取れるだなんて、はは、面白い冗談だ」

「ねえ——」

「なんだ」

「動揺、してない」

先ほどの余裕とは打って変わったように、黒うさぎは明らかに焦りを見せている。

顔を引き攣らせ無理な作り笑顔をしながら、あたふたと可笑しいなジェスチャーを繰り返す。

「し、してないさ。黒うさぎが動揺？ は、そんなもの童謡にも書かれてない事実無根の虚言だよ」

「……動揺と童謡を掛けたの？ あんまり面白くないね」

「そんなつもりは……ない」

仄かに頬を朱に染めて、青年は恥ずかしそうにそっぽを向いた。

02―赤い影の異形

「って、そんなことはどうでもいいんだよ！」

ハッとした青年は声を荒げ、煩わしそうに早足で亜莉栖の元へと歩み寄る。

ビクツと一瞬肩を震わせた亜莉栖は反射的にさらに後退り、

「――えっ？ て、――うわぁっ！」

バシャッ！ と飛沫を上げながら、泉の中へと背中からダイブした。

「なにしてんだ、お前？ ……水浴びでもしたかったのか？」

絶えず気泡が浮き出る泉の一点を見つめながら、青年は啞然として立ち止まる。

少しして、気泡が小さくなってくると、そこに茶色の影が浮かび上がる。

ザバツ――と盛大な音を出しながら飛び出てきた少女は、空気を求める魚のようにもがきながら泉の縁につかまった。

「ゲホツゲホツ！ ふ、深い！ ちょっと、助けて、って、ば――」

ヘルプを叫ぶ少女に冷ややかな視線を注ぎながらも、小さく息をつき、青年は肩を竦めながら再び歩を進めた。

亜莉栖の前までやってくると膝を曲げ、手を差し出し、宙を扇ぐ水に洗われた少女の手を掴む。

まるで女性のように華奢な体つきながらも、どこにそんな力が備

わっているのかと疑問に思うほどの勢いで、亜莉栖は泉から引き上げられる。

「あ、ありがとう。助かったわ」

地に座り込み肩で息をし、焦りから乱れた呼吸を整えるよう亜莉栖は深い呼吸を繰り返す。

やがて心拍数が落ち着き出すと、今度は水に濡れ、重くなった栗色の長い髪をおもむろに絞り始めた。

「マジ焦った……し、死ぬかと思った……夢の癖してなんでこんな目にあわなきゃなんないのよ……」

絞るたびに落ちる雫を眺めながら、ぶつぶつと文句を垂れる。

そこへ割り込む青年の声。

「だから、夢じゃないって言うてるだろ。まったく、なんでこうも“アリス”はいつもいつも物分りが悪い奴ばかりなんだ……」

聞こえていないのか、今度は手で髪を梳き流れを整え始める亜莉栖。

そんな少女に対し疲れた風に肩を落とす青年に、亜莉栖は弾かれるように振り向くと怪訝な顔をして訊ねる。

「だいたい、なんであなたわたしの名前知ってんのよ！　そもそも、人の名前勝手に呼んでおいて自分は名乗らないなんて、執事みたいな格好しておいて失礼なんじゃないの？！」

「ん？　ああ……まあ、それもそうか」

納得したように頷くと、うさ耳の男は一つ咳払いをし――

「名乗るのが遅れた、オレの名前はグリ——」

胸に手を当てそこまで口にし、一礼しようとして不意に言葉を遮られる。

「いや、別に知ったところで何にもなんないし。どうせ夢なんだから」

……聞いておいて適当なことをぬかす。

そんな亜莉栖に目を細め、ある衝動から戦慄く体を必死に我慢しているように見える黒うさぎ。

ここで殺ってしまったては元も子もないと、顔を引きつらせながらも一呼吸置いた。

「夢？ なに言ってたさっきから」

「だから夢よ。まさかあんた見たことないの？」

「いや、あるが……。これは夢じゃない」

「夢よ！ 夢に決まってるじゃない。こんな変態が出てくる悪夢みたいなの、夢以外に考えられないわ！」

「……悪夢はこれからなんだけど……。じゃあ、頬でも抓ってみるよ——」

「あー言われなくても抓るわよ！ まったく、こんな原始的な夢覚ましを、高校生にもなってやることになるなんて——」

こめかみに手をやる青年の大事そうな一言を完全にスルーし、文句を言いながらも亜莉栖は頬を指で挟んだ。

「夢なんだから、痛いわけないでしょ！」

語尾を殊更のように強調し、思いつきそれを引っ張る。
柔らかそうな白い頬はマシユマロのように伸び――、

「いったーッ！！！！」

泉の広場に亜莉栖の絶叫が木霊した。

「な、なんで？！　ねえ、なんで痛いのもっ！？」

「知らねえよ。でも分かっただろ？　ここは夢じゃない、現実なんだ。いいかげん受け止めるよ」

ジンジンと痺れ少し赤くなった頬を擦りながら、亜莉栖は涙目で黒服を見上げる。

蒼く澄んだ空がなんの感情もなく、ただ自分を見下ろしていた。
最後の審判を言い渡されたかのように、亜莉栖の思考が働くことをやめる。だが、それは一瞬のことだった。我に返った亜莉栖は、それに抗うかのように再び口を動かす。

「そんなのいやよ！　……そうよ、きつとまた眠りに就けばいいんだわ」

「今度のアリスは騒々しいな――」

「ちよつとあんた！」

「な、なんだよ」

あまりの剣幕に、大きく仰け反った黒うさぎが応える。

「子守唄でも歌いなさいよ」

「なんでオレがそんなこと――」

「ゴチャゴチャ煩い！　変態うさぎの癖に！」

「変態は余計だ！　つつか、あんまデカイ声を出すんじゃないよ！

ヤツらに気づかれるだろうが！」

——キキキキキキキキキキ……ギギッ。

それは青年の怒声と重なるように響いた。

どこからともなく聞こえた奇怪な音に、一瞬で青年の纏う空気に割れんばかりの緊張が走る。

樹葉のざわめきは一層の強まりを見せた。

「な、なに？ 今の……虫……？」

「このバカ女……、だから言っただろうが」

「え、な、なに？ ちゃんと説明してよ」

今までは、まだどこか丸みを帯びていた青年の目つきが、その一瞬で刺々しいまでの、殺意すら感じさせるものへと変貌したことに亜莉栖は戸惑いを隠せない。

唾を飲み込む音に混じり、梢が激しく揺れる音が更に大きさを増していく。それと同時に迫り来る“何か”の気配。

怯える少女を見下ろしながら、黒いうさは静かに口を開いた。

「——急ぐぞ」

「え？」

「逃げるんだよ！ 喰われないのか」

言いながら、地面にへたり込む亜莉栖の手を無理やりとる青年は、そのまま全力で駆け出そうとした。

「ちょ、ちょっと待ってよ。いったいどこ連れて——」

「一先ず公爵のところまでだ。死にたくなければついてこい！」

言われるがままに手を引かれ、言い知れぬ恐怖に押されるように、亜莉栖は暗い森の中へと駆け出す。

泉の畔にただ一つ、嗤う……うさぎのぬいぐるみを残して――。

木々のざわめきに肌が粟立つ。

霧が立ち込めてきたそんな不気味な森の中、道なき道を二人はひた走る。

「はぁ……はぁ……はっ……はぁ……はぁ……」

その二つの背中を追う“なにか”に追いつかれぬよう、纏れそうになる足を前へ踏み出し、亜莉栖も必死で青年についていく。

「大丈夫か？」

走り始めておよそ五分。

全力に近いスピードで駆けているため息切れしている亜莉栖。それに比べ、うさ耳の青年は息一つ乱さずに、振り返り声をかけるほどの余裕がある。

中学では陸上もやっていたこともある亜莉栖には、体力に少しは自信があったのだが……。湿る腐葉土はぬかるみ、非常に走り難いことこの上ない。

何度も滑りそうになりながらも、それを許さないと急かす手を引く男の腕。

訳も分からないままに走らされ、次第に高まってきた苛立ちの張り付いて剥がれない表情のまま、亜莉栖は青年に問いかけた。

「だい、じょうぶ……。はあ、はあ……。てか、いったい、どこまで……走れば、いいのよ……。！」

「まだ半分も来ていない。死にたくなければ全力で逃げ切れ」

さらりと一言、途中棄権したくなるようなことを言っただけの青年の顔にも、本当は余裕なんてないことを、今の亜莉栖に気づけるはずもなかった。

「いったい、何から、逃げろって、言うのよ……。わけが……。分かんないわ」

「このままじゃ追いつかれる、もう少しスピード上げるぞ。喋っていると舌噛むから少し黙れ」

（こ、これ以上速度上げられたら、間違いなく死んじゃうわよ！なに考えてんのよ、この変態うさぎは——って）

思考するや否や、車がギアチェンジするかの如く青年の走行速度が一段と増した。

木々が左右に流れていく。まるで青年を避けるかのように。

飛んでいるような浮遊感をも生み出すあまりの速さに、亜莉栖は自然に目を瞑る。

それがなぜかは分からない。

手を引かれている安心感が、それとも青年を信じられる者だと無意識的に直感したからだろうか。

しかし、彼に身を委ねて……。……亜莉栖は後悔することになる。

「——えッ?! って、ウキヤアアア——!!」

張り出した太い木の根に躓いて、飛ぶように転倒してしまったの

だ。

今度は顔面から地面にダイブした亜莉栖。数瞬ののち顔を上げ、地面に彫られた自分のマスクに視線を落とす。

下が湿気を多量に含んだ柔らかい腐葉土だったため、顔に大した傷は負わなかったが……。

キツと怒りをその目に宿して、自分より数歩離れた位置で立ち止まる青年を睨みつけた。

「いったいわね！ 一体どこ見て走ってんのよ！」

「知るかよバカ。お前がよそ見してるからだろ」

「違うわよ！ 目閉じてただけでしょ」

「あの走行中に目を閉じる奴がどこにいるんだよ」

「あーもう！ あんたのこと、多少でも信じたわたしが馬鹿だったわ」

「いいから早く立てよ、こんなことしてる場合じゃないんだ。本当に追いつか——ッ?!」

近づき、再び手を差し出した青年の動きがピタリと止まる。その顔には驚愕の二文字。戦慄の微振動が青年を揺らす。

「ん？ どうしたの、そんなに驚いて……」

その視線の先を、亜莉栖は振り返り目で追ってみた。

背後にあった太い木の根元、そこから幹を伝いさらに上へ。怪しくまるで手招くようにそよぐ樹葉の一部に、影とも取れぬ血のように真っ赤な霧状のシルエツトが浮かび上がっている。

「んな、なに、あれ……」

『キキキキキッ、ギッギッ、ギッ』

先ほど聞いた奇怪な音の正体。

それは鋭い鉤爪状の腕を持ち、蛇のような体、そして竜にも似た拉ひしゃげた頭をした四足の異形だった。体長は優に人間の五倍ほどはあるだろう。

背には蝙蝠のような羽、そして両の手には先端に向かって鉤状に曲がる、奇妙な形をした剣を携えている。

「チツ、追いつかれたか」

言いながら、亜莉栖を庇うようにしてその前に立つ青年。

無言のまま、スツと音もなく懐へ手を入れると、先に取り出した黒塗りの回転式拳銃を左手に構える。

「ね、ねえったら。あの気持ちの悪い生き物、な、なんなのよ」

不定期に実体を持つては不定形な霧へと都度、姿を変える赤い霧。得体の知れない生物に、あまりの恐怖から慄く亜莉栖に対し、

「動くなよ。頭潰してるからといっても、ヤツは体内器官で空気の流れを感じ、獲物の位置を特定することが出来る。真っ先に襲われなくては息も殺してる」

青年は鋭い眼光で“敵”を見据えたまま、後ろの少女へキツく注意を促す。

（そんなこと言われたって……ッ！ なに？ なんなの？ 何が起こってるの？ ここは一体どこなのよ！！）

言われたとおりに息を止め、指先一つも動かさないままに亜莉栖は青年の背中をただ見つめた。

突如、異形は鎌首をもたげる。

そして、瞬間——青年は駆け出した。

「こつちだ、化物」

挑発するように発した声に、異形は鋭く反応する。

まるで蛇がうねりながら進むように宙を這いずり、血の霧散する頭を振り乱す。

と、誘導するように蛇行していた黒いうさ耳が屈んだと思った刹那——青年は忽然とその姿を消していた。

異形も意外だったようで、面食らったように辺りを見回し、その場で右往左往を繰り返す。

（え？ き、消えた……？ ま、まさか——わたしを置いて……逃げ、た……？）

自分を生贄にでもするつもりなのか、と恐怖に顔を引き攣らせる。声も出せない息苦しい状況の中、亜莉栖は心の中で怨嗟を叫んだ。

（あの変態黒うさぎ——ッ！！）

と次の瞬間、

「勿体無いから、こいつはあまり使いたくないんだけど……」

頭上から聞こえた男の声。視線だけを空へと投げた亜莉栖はその姿を視認する。

あの一瞬で青年は上空へ飛び、姿をくらまし、異形の真上を取っていた。

幽かな霧に朧げに光る拳銃を構え、狙うのは異形の首筋。赤い霧

状のただ一点、実体を持つ瞬間に浮かび上がる黒点になっている部分だ。

声に反応し見上げる化物。点の位置が僅かにずれる。それと同時に構えた二本の曲刀。

チツと再び舌を打ち鳴らしたのを合図のように、青年は体を半身捻り、近場の梢を蹴って推進力を得る。しなやかな枝はバネのように大きな反動を生み出した。

化物と相対する距離、およそ五メートル。

何度も枝を蹴り、攪乱するように幾筋もの軌道を描く青年の跳躍は、やがて五芒星を描いたところで跳ねた最後の飛躍により、その距離を一気に縮めた。

交差する異形と青年。

赤の霧が実体となった瞬間——ガアアんと、けたたましい銃声を森に響かせ火を噴いた銃口から、至近距離で放たれた青白い弾丸は狙いを過たず、ピンポイントで異形の黒点を打ち抜いた。

「やった、の？」

その瞬間を目にし安堵したのか、回転しながら着地した青年の背中に向かって亜莉栖は問いかける。

青年は銃を仕舞いながら顔だけをそちらへ向けて、その最期を確認した。

「たぶんな」

「いや、たぶんで……あつ」

視界に入る首の折れた赤い影は、次第にその体を空気に溶け込ませてゆく。

徐々に消えていくその姿。

やがて完全に霧散し消失した現場には、バラのように赤い血溜ま

りが残されていた。

「……………うつぶ」

直後、唐突に亜莉栖の鼻腔を突いたのは、辺りに立ち込めるその血液の臭いだった。

容易に味の想像がつくような、嗅ぎたくもないものを無理やり鼻にぶち込まれたように、強烈に届く濃厚な鉄の臭い。

ホラーゲームはまあ好きだ。スプラッターやスリラー映画もたまに見る。

けれど、実際そうだった現場にいたとしたら、誰だってこういった反応になるだろう。

……………狂気に心を支配されていなければ――。

以前にもあったような嘔吐きにも似た不快感に身悶えながら、落ち着くまでのしばらくの間、亜莉栖はその場に蹲っていた。

03―奇怪樹の森を抜けて

「立てるか？」

青年に問われ、亜莉栖は頷くことで返事とした。

少し休み不快な気分は幾分かマシになりはしたものの、しかし辺りに立ち込める血臭はいまだ晴れず、亜莉栖は嫌そうに顔を顰めて青年を見返す。

「ねえ、ところでさっきの怪物はなんだったの？」

「気になるのか？」

「当たり前じゃない。訳もわからず襲われて、危うく殺されそうになっただから」

「……まあ、それもそうだな」

「もしかして、あれがさっき言ってた、わたしを『ストーキング』するやつ？」

怯えた表情で訊ねる亜莉栖に、青年はこくりと頷いた。

「その一つに過ぎないが……。さっきのヤツは“ジャバウオック”
と言って――」

「えっ……あれが、ジャバウオックなの？」

「ん？　なんだ、知ってるのか？」

意外そうな顔をして青年は問い返す。

亜莉栖はそれに愕然と頷くと、しばしの間、思考に入る――。

それは幼き日に、耳にたこが出来るほどよく読み聞かせられた、

童話に登場する名前だった。

亜莉栖の両親は大のルイス・キャロルファンで、それは娘に童話の主人公である「アリス」と同じ名前をつけた所からも垣間見えるだろう。

本当は「アリス」とカナ表記にしたかったようだが、生粋の日本人なのにそれは少しおかしいだろうと思い直し、亜莉栖が生まれる直前になって、急遽漢字表記に変更したそうだ。

という話を、亜莉栖は小学生のころに母親から聞かされた。

そしてジャバウオックは、その童話の一つ、『鏡の国のアリス』にその名が登場する。

「ジャバウオックの詩」

この詩では、ジャバウオックと呼ばれる正体不明の怪物が、名もない勇者によって打ち倒されるという事件が、かばん語と呼ばれる多数のナンセンスな単語による叙事詩という形で描写されている。

ジョン・テニエルによる挿絵では、ジャバウオックに立ち向かう名のない勇者は少女の姿をしており、一般的にそれがアリスであるという解釈もなされている。

そういえば似たようなモンスターが、「アリス・イン・デスゲーム」にも出てきたな、と亜莉栖は記憶の断片から思い起こす。しかしそのゲームでは味方だったのだが……。

おかしいな、と思いながら、熱でも発しそうなくらい熟考する亜莉栖に、黒うさぎは横から言葉を付け足した。

「といつても、ヤツは影なんだがな」

「……影？」

言葉に振り向き、亜莉栖は小首を傾げる。

たしかにほぼ霧状で、時たま実体とはなっていたが、それらしい実体ではなかった。

「どういうこと？」

「それは……。というか、お前平気なのか？」
「なにが？」

突然問われた言葉の意味が分からずに、亜莉栖はキョトン顔で青年に聞き返す。

「いや、ヤツの血の臭いだよ」

「……あー、そう言えば……。うん、大分慣れてきたみたい」

先ほどは不快でしうがなかつた場の臭いも、長考したおかげかはたまた嗅覚がイカれたのか、そこまで気にならなくなつてきていた。

しかしそんなアリスに怪訝な視線を投げかけるのは他でもない、訊ねた黒うさぎだった。

……普通の人間が——しかもここへ来たばかりの“アリス”が——これだけの短時間であの臭いに慣れる筈がない。これはもしかすると——。

不思議そうな顔をして自分を見返すまだあどけなさを残す少女に、青年はある一つの可能性を見出した。

「まあいい。次が来る前にここを離れよう」

「えっ、もう行くの」

「休んで楽になったんだろう？ ヤツらは血を回収する習性があるんだ。チンタラしていると、囲まれるぞ。それにだ——」
「え？」

黒うさぎは亜莉栖の姿を指差した。

「その格好どうにかしろ」

言われて自身の姿を確認すると、今まで混乱していたため格好など気にしていなかったが、半袖の白TEEシャツに下は黒ジャージという出で立ちだったことに初めて気づく。

しかも今までの行動により、原色を留めていないほどに泥に塗れてしまっていた。

脳裏を掠めた記憶。

それにより意識がなくなる前に、ゲームをやっていた時のままの格好であることを気づかされる。

そしてふと思いつく。最近読んだ小説に、異世界トリップという言葉があつたことを……。

それは何かの拍子に、自分がいた世界とはまるで違うパラレルワールドに迷い込んだり、はたまた何者かに召喚されたり、偶発的に飛ばされたりする現象だ。

「不思議の国のアリス」も、たぶんそうなんだろうな。と暢気に考えていたのも束の間――。

ハッとした亜莉栖は泥だらけの手で掴みかからんとする勢いのまま、青年に激しく詰め寄った。

「うおっ?! なんだよ汚ねえな。泥がつくだろっが、はな――」

「ねえ! これって、夢じゃないの」

「あ? だからさっきからそう言ってるだろう」

途端、亜莉栖の動きが硬直する。

黒うさぎはそんな亜莉栖を余所に、服が汚れないようそれとなく離れた。

「な、なんてことなの……まさか、本当に異世界トリップ？ わたしが、しちゃったっていうの……？」

訳の分からないことをぶつぶつと口にしながら震えるアリスを、青年はジッと眺めている。

その眼差しはどこか品定めしているようにも見え、しかし亜莉栖はその視線に気づく様子もない。

「あんた、さつきからわたしのこと、“アリス”って呼ぶけど……。もしかして、アリスってあのアリス？」

「？ 何を言いたいのかいまいちよく解らんが、アリスは“アリス”しかないだろう」

「……それで、さつきのがジャバウォックって事は……ここが、まさかワンダーランド……？」

「比べればなかなか物分りがいいな。今までのやつらはそれを理解する前にたいてい死んだのにな」

「……えっ？ それってどういう——」

「ほら、話は公爵のところへ戻ってからだ。さつさと森を抜けるぞ」

疑問の言葉は途中で遮られ、再び手を握られる。

あれだけ近づくのを躊躇っていたにもかかわらず、黒うさぎは泥に塗れた亜莉栖の手をしっかりと握り締めた。

疑問はひとまず胸の奥にしまい込み、再び走り出した青年に手を引かれながら、血臭の濃くなる怪しい森を、亜莉栖は二人で駆け抜けた。

しばらく走り、今度は違う森に入ったことを亜莉栖は自ずと認識する。

「なに、この気持ちの悪いところ」

亜莉栖の目の前に広がる光景。

それは、樹皮にまるで人面を彫りこんだような奇怪な木々の生い茂る、気色の悪い低木林だった。

「ここは奇怪樹の森だ」

「……って、そのまんまじゃない」

「それ以外に名づけようがないだろう？」

「……まあ、それもそうだけど」

「ここまで来れば血を回収しに来たヤツに見つかることはないしな、普通に歩いていくか」

ちょうど森の中ほどに差し掛かったところだろうか。

亜莉栖に振り向いた黒うさぎは、安全を確認すると繋いでいた手をそつと離れた。

見返す亜莉栖は瞳に不安を宿しながら、

「本当に大丈夫なの？」

訊ねると、至って冷静に青年は答える。

「ジャバウォックは鼻がよくないからな」

付き添うようにして歩いていく森の中、亜莉栖はふと思い出す。

（……そういえば、まだこいつの名前知らなかった……）

「ねえ——」

少し見上げながら隣の男に声をかけると、

「なんだ、腹でも減ったのか。もう少し待ってろ、ここを抜ければ公爵の城だからな。なんならそこに生えてるキノコでも食べばいい」

「——って、なに一人で勝手に解釈してんのよ！」

「腹が減ったんじゃないのか？」

「違うわよ！　ただ、あんたの名前を聞きそびれてたから聞こうと思っただけでしょ」

お腹を空かせてる子、という不名誉なレッテルを勝手に貼られそうになり、亜莉栖は不機嫌極まりないといった風にむくれっ面を顕にする。

そんな亜莉栖に対し、黒うさぎは一瞬、フツと笑みを零した。それは出会ってから初めて見せた、青年の“優しさ”だったのかもしれない。

子供のように不貞腐れる亜莉栖を横目で一瞥すると、青年は静かに口を開いた。

「オレの名前は、グリム・フォン・シュヴァルツだ。自己紹介が大分遅れたが、黒の公爵の城であるブラック・キャッスルで、とりあえず不本意ながら執事をしている」

「グリムね！　あ、わたしは黒崎亜莉栖、よろしく」

そう言って握手をしようと青年に手を差し出すと、青年はその歩みを止めた。

「……」

「え、なに、どうしたの？」

手を差し出す亜莉栖を見返し、黒うさぎは軽く首を振る。

「お前と馴れ合うつもりはない。だが、お前はオレたちが守る。…
…なんとしてでもな」

その表情から決意の色が見て取れるほど、青年は真面目な顔つきで声を発した。

何も言えなくなるような儼かな雰囲気、亜莉栖はそれ以上口を開くことが出来なかった。

「さあ、オレたちの城はすぐそこだ。いくぞ」

立ちすくむ亜莉栖に背を向けて、黒いうさぎは歩き出す。

見つめる背中はどこまでも黒く、同時に、ほんの少しの哀愁を感じさせた。

先を行く青年の背を考え深げに見つめながら、亜莉栖は後ろをついて行く。

その先で、絶望の現実と、幻想の希望を知らされるとも知らずに――。

04―黒の城の住人たち その1 大きな帽子の女の子

狭まる奇怪樹たちを縫うようにして、森を抜けた亜莉栖の視界が突然開けた。

目の前に広がる風景は、まるでヨーロッパの格式高い貴族の所有地そのものだ。

そしてまず目に付いたのは鉄門だ。高さ五メートルもある格子状のそれは、錆や欠けの見当たらないほど綺麗な造りで全てが黒塗りであった。

グリムは無言のまま門へ近づいていくと、門は自動に両開き、青年を敷地内へと受け入れる。

亜莉栖はその場に立ち尽くし、キョロキョロと見渡し、まるで小学校の修学旅行生のようにガーゴイルの像やその他珍しいものを見学していると、

「なにしてるんだ、さっさと入れ」

手招きされ、黒いうさ耳に急ぐようにと促される。

まだ自由行動ではないことを悟ると、亜莉栖は一步步つ前へと踏み出し、

「おじゃま、します……」

自分はいささか場違いなんじゃないかと、少し遠慮がちに黒塗りの門をくぐり抜け、敷地内へと足を踏み入れる。

――瞬間、感じたのは匂いだ。明らかに先ほどまでの外の空気とはまるで違う。ここには、死臭がない。

かと言つて特別なんの匂いがするわけでもないが、血生臭さがすっかり消えたことに亜莉栖は安堵のため息をつく。

亜莉栖が庭へ入ると同時、グリムは踵を返して歩き出した。

それに続く亜莉栖は好奇心旺盛な瞳で庭を見物する。

庭園に花はなく、殺風景かと思いきや。丁寧に刈り取られた芝生はまるでチェスボードのようになっており、白黒市松のボードの上には亜莉栖の背丈以上もある数々の駒が配置されている。しかしおかしい光景だ。どこにも白のキングが見当たらない。変わりにあるのは、真っ赤なクイーンと、その他の駒だけ。

しかもよくよく見てみると、ゲームはすでに勝敗を決しているようだった。

クイーンをキングとして捉えるならば、赤のクイーンに対し、黒のポーンがチェックをかけている。恐らくはクイーンにプロモーションしているだろうが……。

一国のトップが、ナイトならまだしも、プロモーションしているとはいえポーンにチェックをかけられるなんて……ちよつと情けない。と亜莉栖は微妙な顔をして、ゲームセットした盤上を見つめていた。

その他に庭で目に付くといえば、中央の噴水だろうか。これまた吹き上がる水以外透明なものはなく、その全てが黒い石造り。

そして視線を正面へと投げた亜莉栖は、先ほど黒うさが言っていた通りの外観の城に、納得したように頷いた。

ブラック・キャッスルの名が表すとおり、その外装全部を黒一色に統一された、五つの尖塔を持つ城が目に見え込んできたのだ。

「本当に黒いのね……」

呟くように発した声に、背中越しの声が届く。

「まあな。ここは黒の王国だから、たいていの物が黒いんだ」

「黒の王国？」

「ああ」

「じゃあ、白の王国もあるの？」

黒があるなら白だろうと、小学生並みの発想力で訊ねると、

「白は……消滅した」

途端に暗くなったグリムの声。思いつめたような表情は、背中を向けられている亜莉栖に分かるはずもない。

「消滅？　じゃああなたたちは、一体なにと闘ってるわけ？　あの変な怪物たち？」

「……赤の王国……」

長い庭をひた歩き、ようやく着いた城の入口。

トランプのスペードを象った紋章が描かれた巨大な鉄扉は、門と同様、グリムの姿を認識すると、独りでに押し開くかのようにして開放された。

黒うさぎはその目の前で立ち止まると、急に執事然として亜莉栖に振り向き、

「オレたちの城へようこそアリス」

謡うように言いながら、今までの慇懃無礼な態度からは想像もつかないほどの丁寧なお辞儀をしてみせた。

それはまるで、華やかな社交界へと足を踏み入れたんじゃないかと勘違いしてしまいそうなほど、人を惹きつけてやまない魅力を振

りまいている礼だった。

先に場内へと通された亜莉栖は、その内装に驚きを隠せない。

「うわぁ……」

煌びやかなエントランスは黒一色かと思いきや、高価そうな像の数々や絵画などの美術品で飾られており、外からの見た目ほど黒を強調したものではない。

二階の左右からは階段が伸び、緩やかなアーチを描きながら一階へと下る。一階の奥には薄暗く狭い回廊が目についた。

庭園のチェスボードと同じく、白と黒の大理石が敷き詰められた市松の床を踏みながら、数歩前へ進んだ亜莉栖。

見上げれば大きなシャンデリアがキラキラと煌き、本当に現実なのか判断がつかなくなるほど、一般家庭で育った亜莉栖からしてみれば、その様は見えていても現実離れしたものだった。

ある意味亜莉栖の家も、現実的ではないとも言えるが。

「不思議の国のアリス」、そして「鏡の国のアリス」の大ファンである両親は、家中グッズで溢れかえさせるほどのコレクターだ。

その余波は亜莉栖の部屋にまで押し寄せ、結果、亜莉栖の自室もワンダーランドじみるまでに変貌してしまった。

ボウとしてうつつを抜かしていると、不意にどこからともなく少女らしき声が聞こえる。

「なんだうさぎ、もう帰ってきたのか？」

声のした方へ振り向くと、亜莉栖の眼下には大きなシルクハットが……。

だばだばな黒のローブの上に男物のジャケットを羽織り、そして目立つほど大きな左手は、機械のようなグローブ型をしている。

さらに帽子のサイドには、挿絵で見たことのある、10/6（10シリリング6ペンス）と書かれた札が添えられていた。

「黒をつける黒を。それじゃどっちか分かんねえだろうが」

帽子から発せられたと思われる物言いに對し、グリムはさも当然のように意見する。

そんなやりとりを見ていた亜莉栖はハツとして、

「……片やうさぎに片や帽子につて……あ、もしかしてあなたマッドハッターね！」

「違う、あんなアホと一緒にするな小娘。ミンチにされたいか」

間断なく返ってきた言葉は、おおそ少女の発するには相応しくない単語だった。

それに対して亜莉栖は不快な表情を顯にする。

「小娘つて……あなたの方が小さいじゃない！」

まるで子供同士の喧嘩だ。

未だに顔を見せないシルクハットの下、身長の高い少女はグリムに問うた。

「おいうさぎ、まさかこいつが新しいアリスか？」

「だから黒を付けると……ぐっ……」

少女と付き合いの長い黒うさぎは、これ以上の反論は無意味であることを理解している。だから素直に頷くことにした。

「……そうだ」

黒うさぎの返事を耳にした少女は、落胆の色を多量に含むため息を一つ。そして首を左右に振る。

「なんてことだ。こんなのがアリスだと？　またウチらの負けじゃないか。女王を喜ばすだけだぞ……」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ」

こんなの呼びわりされ気に触ったのか、意味不明なことを口走る少女に対し、亜莉栖は食ってかかった。

「あんたね、名も名乗らないで訳分かんない事言ってるじゃないわよ！　大体わたしだって、こんな所に来たくて来たわけじゃないのに！」

「ほう、今回ののは多少威勢がいいようだな」

「まあな。オレにも食ってかかってきてたさ」

「まあ、お前はなめられてもしかたないだろう？」

「なんだと？　まあ、肝が多少据わってるのはいいことだな。ヤツらを見ても泣き出さなかっただけ今までよりもマシだ」

自分を他所に話し出す二人に苛立ちを覚え、亜莉栖は会話に割り込んだ。

「ちょっとわたしのはな——」

「それにそれだけじゃない。ヤツらの血液に対する免疫まで持つてる」

が、すぐさま言葉は遮られ、

「ほう！ 来たばかりの“アリス”がか！？」

尊大不遜な態度をとっていた少女は、グリムの一言で感心したように顔を上げた。

「……あ、可愛い」

帽子に隠れて見えなかったその顔は、十歳くらいの少女に見える。肌は透き通るように白く、唇は瑞々しさ、柔らかさが伝わるほどぽつてりとしていた。

お人形さんみたいなあまりの可愛らしさに、なにに対して怒っていたのか亜莉栖自身忘れてしまうほどだ。

くりくりの瞳は純粋な赤色で、好奇に満ちた眼差しで亜莉栖を見上げていたが、

「誰が可愛いだ小娘、ミンチにされたいのか？」

外見を褒められるのが嫌いなのだろうか。亜莉栖の言葉を聞いた瞬間、メンチを切る少女。

その威圧感黒うさぎをもたじろがせるものだったのだが、

「——って、褒めてるのにそれはな……」

「いいから落ち着け、このままじゃ話が進まない」

あまり少女を怒らせると後が怖いことを知っているグリムは、火

種を摘み取るために咄嗟に亜莉栖の口を塞いだ。

口を封じられた亜莉栖の声は、くぐもりながら喉奥へ。

「まあ、それもそうだな。アリスいじりはこれから出来ることだし、これでしばらくは退屈しのぎに困ることはないか……」

「んもうもう~~~~？！（あんたはあたしをどうするつもりだ！！）」

「おおっとすまない。これじゃゲームが始まる前にゲームオーバーだな」

気づけば口と鼻を塞いでいた手をパツと離し、グリムは少女の隣に立つ。

すると帽子の少女は顔を上げ、亜莉栖を見ながら口を開いた。

「しょうがない、不本意だが教えてやる」

「違うだろ、遅れたのをまず詫びろ」

「うるさいうさぎ！ 変なところで執事面するな！」

ポンと頭を叩かれた少女は、そのまま振り向きざまにグリムの脛へ蹴りを放った。身長が低いため、ちょうどその蹴りは弁慶を直撃。おおぅ、と呻きながら前かがみになり、黒うさぎは涙目で蹲る。ふんっ、と鼻を鳴らすと、少女は続けた。

「……仕方がないから詫びてやる。紹介が遅れたなアリス、ウチはアンダーテイカーのマティツェッペリンだ」

「アンダー、テイカー？ そんなのいたっけ？」

痛そうに脛を摩る黒うさぎを他所に、亜莉栖は聞いたこともない言葉に疑問を呈した。

すると無理をした風にすっと立ち上がる黒うさぎは、それに端

的に答える。

「墓堀人だ……。まあ、正確には葬儀屋なんだが――」

「なんだ、もう少し寝てろよ、うさぎ」

「馬鹿言え。このくらいでくたばってたら、これから先こいつを守れないだろうが……」

疑問の答えにはまるでなっておらず、楽しげに会話し出す二人についていけない亜莉栖は、一人取り残される形となった。

……それから数分後……。

「そうだ、公爵のやつはどこだ？」

思い出したように発せられた青年の声に、呆然としていた亜莉栖は瞬時に反応を示した。

「ちよつとちよつと、公爵って、執事のあんたより遥かに位が高い貴族なんじゃ……」

「ん？ それがどうかしたのか？」

「どうかしたのか？ じゃなくて、仕える側の人間がそんな言葉遣いして大丈夫なのかってことよ」

どこで誰が聞いているかも分からない城内で、亜莉栖は自然にヒソヒソ声になる。

「ああ、そんなことが……。それなら大丈夫だろ、お前もその内分かる」

それが当たり前のような口振りに、亜莉栖は怪訝な表情を浮かべ

た。

小さく息を吐くと、がっかりした様子で、

「わたし、執事つてもっと慇懃なのかと思ってた……。けど、幻想だったみたい……」

「はは、グリムにそんなこと期待しても無駄だ。こいつは少し変わってるからな。なんせあのみ——」

「オホン！」

マティが何かを言おうとした瞬間、黒うさぎは殺人鬼も吃驚なほどの鬼の形相で少女を睨むと、一つわざとらしく咳をした。

大層驚いた様子のマティは、帽子を押し下げ、無言の威圧感から逃れようと身を縮ませる。

(……この二人の関係って、どっちが上なのかしら)

亜莉栖はそんな事を思いながら、二人を不思議そうに交互に見比べた。

「……さて、ところで、公爵はどこ行つた？」

グリムの声がいつも通りの口調であることを確認すると、少女は帽子を上げながら言った。

「やつなら厨房だ。今頃食ってる最中なんじゃないか？」

「なんだまたなのか」

「しょうがないだろ。やつの暇つぶしって言えば、それくらいしかなかったんだからな」

「それもそうだがな」

「だが、これからは安心だろう？ あいつの楽しみが“戻って”き

「ただから」

「……それも、そう、けどな」

グリムとマティは揃って亜莉栖を見やる。その視線はどこか同情しているようにも見え……。

「な、なによ」

「頼んだぞ」

言われ、黒うさぎに肩を叩かれる亜莉栖。

「なにが？」

「さて、では厨房に行こうか、アリス」

疑問符の浮かぶほど首を傾げた亜莉栖は、そのまま背中を押され、厨房へと連行されていった。

05―黒の城の住人たち その2 幼稚な公爵

城を入ってすぐ見えていた、一階正面の狭い回廊を歩くことおよそ五分。

城内は広く、薄明かりしか灯されていないため、回廊を歩けば歩くほど方向感覚も次第に狂ってくる。

迷路のように入り組んだ道程は、さすがに覚えるのには時間がかかりそうだった。

そうして着いた一つの扉。

例に倣って、スペードの紋章が描かれた扉には、合わせて「クッキングルーム」と書かれたプレートが打ち付けられている。

「さあ着いたぞ、ここが厨房だ」

黒うさは亜莉栖の肩をポンと叩き、扉を開けるように促した。

一度顔を見返した亜莉栖は、「なんでわたしが？」といった表情を浮かべると、扉へ視線を移し、取っ手に静かに手を添える。

すると急に中から聞こえた妖しい声――。

「こ、公爵様、い、いけません……」

それは女性の声だった。

強く言いたいのが遠慮がちで、でも満更でもないような声に次いで

……、

「よいではないか。世は……世は……」

興奮したように鼻息を荒くする、野太い男性の声が聞こえる。

「ちょ、ちよつとちよつと……！」

亜莉栖は掴んだドアノブから手を離し、顔を背け、隣に立っているグリムの袖を掴みながら小声で話しかけた。

「なんだ？　つつか汚れるだろ、離せ」

いまだ着替えを終えていないため、亜莉栖の服は泥で汚れている。それが飛び火することを嫌ったグリムはすばやくその手を払った。

「さつき食べてる最中だつて言つてたあれ……そ、そういうことだったのっ?!」

払われたことを気にすることもなく、しかし男女の情事を想像してしまい、瞬時に顔を真っ赤に染め上げる亜莉栖。

それに対して青年は、下へ視線を移してマティとアイコンタクトをとる。

「なにを想像しとるか知らんが、入らなきゃ話にならない。開けて見ってみろ」

少女は半ばうんざりした様子で肩を竦めると、青年に向かって開けると手で合図をする。

グリムは小さく嘆息し、ドアノブに手をかけた。

「ちよつと待つて！　わたしまだ心の準備が——」

ガチャ——。

亜莉栖の静止も意味を成さず、扉が開けられた瞬間香ったのは、甘い匂いだ。隙間から、まるで街のケーキショップにいるようなお

菓子の匂いが洩れてきた。

暗がりな廊下に眩い光が射し込み、亜莉栖の視界がゆっくりと開けていく。

照明の光に慣れていない目を塞ぎ、背中を押されながら亜莉栖は数歩前へと進む。

耳をつくのは男の荒い鼻息、そしてそれを止めようとする女性の声。

亜莉栖は手で顔を覆ったまま、気恥ずかしさからイヤイヤを繰り返す。

——ムシャ、ムシャ、ボリ。

「……ん？」

途端に聞こえた咀嚼音。

——ムシャ、ムシャ、ボリボリ……。

亜莉栖は指を少しだけ広げて、その隙間から向こう側を覗いてみた。

するとまず、がっくりと残念そうに頂垂れる、メイドの格好をした女性の姿が目についた。

咀嚼音を聞きながら首を左右に振り、こめかみに手を添えてはまた首を振る。

そしてその視線の先、調理台の上に胡坐を掻いて座るのは、コスプレのような黒い王族衣装に身を包む中年の男だった。

鼻息を荒くしては、台の上に乗せられたクッキーやらケーキやらを大量に口へと運び入れている。

あまりに突飛な出来事に、亜莉栖は目を丸くした。

「なに、あれ？」

誰に向かって問うでもなく呟かれたその言葉に、グリムは愕然とした態度で答える。

「あれが黒の公爵だ——」

「ただの変態だ」

グリムの声に一拍の間も置かず、マティは顔を顰めて言い放つ。そしてそのまま公爵へと声を投げた。

「おい公爵、アリスが来たぞ」

「……世は……世は……」

少女の声が届いていないのか、ぶつぶつと呟きながら、ただひたすらに菓子を頬張る男。

その目は虚ろで、なにも映していないように見える。

「……なんか、危険な感じがするわね」

「まあ、お前にしてみれば、危険だと言わざるを得ないだろうな」
「え、それどうということ？」

少女へ聞き返す亜莉栖の声が聞こえたのか、公爵らしき男はピクツと反応を示しその手を休める。

そして両の手に菓子を持ちながらゆっくりと振り返った。

「うえ………?!」

目が合ったその男の顔を見た瞬間、亜莉栖は驚きのあまり大きく仰け反る。

お菓子が好きそうにはまるで見えない、厳つい強面のオヤジだったからだ。口の周りをケーキで汚したくりくりの金髪天パ男は、虚

るな瞳をしたまま順々に人物の確認をする。

見慣れた黒うさぎ、口うるさい帽子の少女、そして――。

今しがた目が合ったばかりの亜莉栖の姿を瞳に映すと、淀んでいた双眸は瞬時に光を取り戻す。

「あ、アリ……アリス、ちゃん？」

「ちゃん？」

強面オヤジから呼ばれるには、まるで似つかわしくない呼ばれ方をした亜莉栖は思いつき顔をしかめた。あまりの気持ち悪さに、生理的に受け付けないと体は身震いする始末。

しかし呼んだ本人はどこか不思議そうに小首を傾げている。

「なにあの人、どうしたの？」

隣で腕組して立っているグリムへ訊ねると、

「ああ、お前の服装が普通じゃないからだろ。そういえば着替えさせるの忘れてたな……。おい公爵、知つての通り、ここへ来るのはアリス以外いないんだ。いいかげんそれくらい学習しろ」

言いながら亜莉栖の肩を引っつかんで、グリムは亜莉栖を公爵の前に立たせる。

軽く背中を押され前のめりながら男の眼前まで来ると……、男は目を血走らせ、荒かった鼻息はまるで機関車のように噴出する。

「アリ……アリスちゃん!!」

「うわっ?!」

いきなり調理台から飛び上がった公爵は、そのまま亜莉栖へ向か

ってダイブした。

亜莉栖はそれを脅威的な危険回避能力で咄嗟に避けると、男はそのままロケットの如く勢いで壁に激突する。

シューと煙を上げる厨房の下壁に振り返ると、脅えた様子で亜莉栖は言った。

「なに?! 敵なの?」

「敵じゃないさ、こいつはこう見えても、この国で一番偉いんだ」

少女は言いながら公爵へ近づく。そしてみつともなく倒れる男の尻に蹴りをかました。

「いつまで寝てんだ! さっさと起きろ」

「は、ハイ!」

声を裏返しつつも、少女の怒声に男は跳ね起きる。

すると一瞬で表情を作り変え、「世は……」言いながら凜々しい男性像を取り繕った。

しかしそれも束の間。やはり公爵には無理があるようで、厳つい強面は瞬時に崩れ、親バカ過ぎる父親のようにならしない顔になった。

「アリスちゃん……」そう言って頬を赤く染め、手をもじもじとさせてはハツとする。

「はあー、まあいい。ようやくこれで揃ったな」

グリムはその様子を見て呆れ顔で呟くと、

「ああそうだ。アリスの着替えを頼む」

いまだに頭を抱えるメイドの一人へ指示をした。

「畏まりました」そう言いながらメイドは、アリスの腕に自身の腕を絡ませた。

「さあアリス様、お召し替えを致しましょう」

「え、ちょ、ちよつと……」

「オレたちは先に謁見の間へ行っている。着替えを終えたらお前も後から来い」

黒うさぎの声を後方に聞きながら、亜莉栖はメイドに連れられて厨房を後にした。

来た道を戻り、二階へと上がってしばらく明るい回廊を歩き、やってきたのは衣装ルームだ。

亜莉栖が来るのを待っていたのか、中には数人のメイドが待機している。

室内を見渡すと、ポールに吊るされたハンガーには所狭しと衣服が掛けられていた。

中には王族衣装や執事服なんかもあり、この部屋が城の住人全ての衣装を収納している場所であることが自ずと理解できる。

「アリス様、まずはその小汚らしいお召し物をお脱ぎになってください」

入口を入ってすぐ、いきなり亜莉栖はメイドから衣服を脱ぐように催促された。

「つてこで？」

「はい。お脱ぎになれましたら、奥の部屋まで進んで頂きます」

言いながらメイドは、部屋の奥を手で示した。

入口からでも見えるガラス張りの小部屋。マジックミラーなのか表面は鏡になっている。

「そこでシャワーを浴びて頂き、終わりましたら体を拭き、全裸のままこちらへいらしてください」

「え?! ぜ、全裸??」

「はい。アリス様のお体を隅々までたつぷりねぶ—— 髭り……」

先の公爵のように目を血走らせ生唾を飲み込み……しかし至って冷静に淡々とメイドは答える。

「いえ、隈なくサイズをお計りし、お体に最適なドレスを仕立て上げるためですので、ご了承下さいませ」

途中如何わしい単語をいくつか挟んだ気もしたが、美しい礼をされ亜莉栖はたじろぎながらも渋々頷いた。

泥だらけのジャージとティーシャツを脱ぎ、水に濡れた下着を脱いでいる途中、幾方向からの視線を感じた。

気になりそちらへ視線を向けると、メイドたちは各々適当な作業を見繕っては目をそらす。

首を傾げながらも脱いだ衣服を籠に入れ、亜莉栖はそのままシャワールームへと歩いていった。

……およそ十分後。

もう何日もシャワーを浴びていなかったかのように思えるほど、

泥に汚れ気持ちの悪かった体を洗い流してさっぱりとした亜莉栖は、濡れた髪を拭きながらシャワールームを出てきた。

……視線を浴びているのも忘れて。

開放感を感じたのだろう、家にいる時と同じ感覚で浴室から出てきた亜莉栖はその視線に気づき……。数度の瞬きの後、

「キャアアアアー!!」

髪を拭いていたタオルで咄嗟に体を隠して屈み込む亜莉栖。その顔は羞恥で真っ赤に染まっている。

「取り押さえる!」

血眼になつて声を上げるのは先のメイドさん。メイド長の声を合図に幾人ものメイドが機敏な動きを見せる。

一人がすばやく亜莉栖を立たせ、一人はその背後に滑り込む。一瞬抱えあげられた亜莉栖は円形をした低いお立ち台の上へ。

そして一人がメジャーを持ち、二人が片腕ずつを上げる。

先のメイドは冷静を装いつつも多少鼻息を荒くし、おもむろに亜莉栖の背後へ。

あまりにも一瞬のこと過ぎて、亜莉栖は思考が追いついてこない。茫然自失と立ち尽くす亜莉栖へ、怪しい笑みを浮かべたメイド長は、ゆっくりと魔手を胸へと近づける。

そして――、ふよん。

大きくはないが形のいい亜莉栖の乳房に触れた。

「え? ……え?」

感触に気づいた亜莉栖は視線を下へと落とす。すると自身の胸を揉みしだく卑猥な手つきの女性の両手を双眸がキャッチした。

「ちょ、ちよつと！　なんでおっぱい揉んでんのよ！」

「アリス様、これも歴としたサイズ測定なので我慢なさってください」

「ていうか、あんたメジャー持ってないじゃない！」

メイドはニヨニヨした顔をして……しかし目つきは真剣に鋭く、黙々と胸を揉み続ける。

「いや、あの、ちよつ、ん……」

「アリス様、変なお声を出さないで下さい、気が散ってしまいます」

「そうですよアリス様。あなたにぴったりなドレスを仕立て上げるためです」

「我慢なさってください」

「そうです、我慢ですよアリス様」

皆一様に笑みを浮かべながら勝手なことばかり言う。周囲にいたメイドたちも我慢の限界なのか、それぞれが腰やヒップに手を伸ばし始める。

アリスは顔を赤らめながらも、しばしの間、羞恥な身体測定に唇を甘く噛みながら、必死に耐えるのであった。

……それからおよそ二十分。

ぐったりした様子の亜莉栖は床に横たえられている。……全裸のまま、タオルを掛けられた状態で。

文字通り頭からつま先まで、妙な手技を交えた身体測定が行われたことに、亜莉栖は疲労困憊してしまったのだ。

賑やかだった室内にメイドは一人。亜莉栖をここまで連れてきたメイド長だけになっていた。

くすくす笑いながら彼女は、肩で息をする亜莉栖に向かって温か

い視線を投げる。満足そうな笑みを口元に称えて。

……亜莉栖が起き上がるちょうどその頃、部屋にはさっきまでいたメイドたちが次々に部屋へと戻ってきた。それぞれの手には衣装が携えられている。

ある者はドレス、ある者はヘッドドレス、ある者はエプロンと、六人揃うとメイド長は声を上げた。

「さあアリス様……お召し替えのお時間です」

「え……？　つてそれに着替えるの？！」

「もちろんです。さあ、お立ち台の上へお上がりください」

無理やり立たせられ、再び亜莉栖はお立ち台の上へ。

まず着付けられたのは下着だった。本人ですら身に着けたことのない大人っぽい黒レースの下着。

続いて穿かせられたのは黒のストッキングだった。ガーターベルトと繋がれたニーハイ丈のもの。左右の腿の辺りには何かを差し込むベルトが付けられている。

上からかぶせられた黒のお仕着せはミニスカートで、その上には純白のエプロンを着させられる。

栗色の長い髪を両サイドで縛られ、最後にヘッドドレスを被せられた亜莉栖。

黒の編み上げブーツを用意されそれに足を通し、手首にはフリルがあしらわれたカフス付き長手袋を着用した。

サササツ——と姿見の前まで移動させられると、あまりの衣装の可愛さに、思わず亜莉栖は目を瞠る。

「これ、わたしの？」

「もちろんですよ。素材がいいから苦勞しませんねー。いえ、アリ

ス様の為なら苦勞なんて惜しみませんけど」

メイド長の言葉もそこに、亜莉栖は体を左右に捻って、いつの間にかメイクまで終わっている自分の姿を確認する。

どこぞのお嬢さんがいるのかと、本人なのにあまり自覚がないようだ。

亜莉栖は年頃の女の子にもかかわらず、普段から衣服やメイクに気を使ったことがない。

元がいいんだから、メイクにもっと気を配ればモテるのに……。とは友人談だ。

衣装が気に入ったのか、先ほどまでの羞恥心が嘘のように晴れ晴れとした顔つきでメイド長を見返すと、

「ありがとうメイドさん！」

両の手をがっしりと掴みブンブンと大きな動作で握手を交わす。

恍惚とした表情を浮かべ熱い吐息を洩らしながら、メイド長はしばしの間時を忘れた。――が、

「あ、アリス様、グリム様とマティ様……それと、変態公爵様がお待ちですので謁見の間へお急ぎください。こちらです」

公爵はついぞと言わんばかりに嫌な顔を見ると、メイド長は亜莉栖の手をとって駆け出した。

亜莉栖は振り向き様に室内に残っていたほかのメイドたちに礼を述べると、メイドたちは遠のく亜莉栖の背中を指を咥えて羨ましそうにジッと眺めていた。

06―千人目の「アリス」

謁見の間では既に公爵、黒うさぎ、アンダーテイカーの三人が集まり、亜莉栖が来るのを今か今かと待ち侘びていた。

公爵は、小階段の上に位置する玉座に腰掛けキョロキョロと辺りを見渡し、まるでらしくないほどに挙動不審だ。自分がその席にふさわしくないことを理解しているのだろうか。

マティはその玉座の隣でなにやら左手のグローブをしきりにいじり倒している。機械の手袋は指先が展開しては細かなアームが突出し、各部の異常を確認するかのような動きをしてはまた元に戻る。グリムはというと、玉座の四方を囲う古代の神殿を模したようなレリーフの彫られた柱の一つに、背もたれながら舟をこいでいた。待ちくたびれて目を閉じている間に、夢の中へと微睡んでしまったようだ。

「ん？」

すると突然、マティが何か音を聞きつけたように顔を上げた。続いてグリムも目を閉じながら顔を上げる。公爵は不安げな顔でおどとし、彼にだけは聞こえていないようだった。

廊下を駆けて来る音は次第に大きくなり、そして――謁見の間の扉が勢いよく開かれる。

「遅れまして申し訳ございません。さ、アリス様、どうぞ玉座の方へ」

陳謝を一言述べてから、メイド長は頭を下げて横へとはける。息を切らしながらも亜莉栖は、乱れた呼吸を整えるかのように深呼吸をしながら歩き出す。

「ほう……」

目を閉じていた黒うさぎは、黒の国に自生する黒いバラの香水を嗅ぎ付け、静かに目を開けてため息を洩らす。

「ようやくアリスらしくなったじゃないか」

先ほどの薄汚れた格好からは想像も出来ないくらい、飛躍的に美しくなった容姿にそう呟くと、恥ずかしいのか亜莉栖は視線を逸らし頬を赤く染める。

「さて、アリスも来たことだし、話を始めるか」

これで何度目だ、と言わんばかりにうんざりした様子でため息をつくと、マティは数歩前へ進む。

そして亜莉栖が玉座の階下へ来たところで説明を始めた。

「アリス、お前にはここがどこだか分かるか？」

唐突に質問され、けれど亜莉栖は慌てることなく頷きながら答えた。

「ワンダーランド、でしょ？」

「その通り、よく知ってるな。まあ、今まで来たやつらの中にも、なんとなく知ってる奴はちらほらいたが……」

腕を組み、感心した風に少女は肯定する。

「ねえ、そのさつきから今までのーとか、アリスだったらーとかっ

て言うのはなんなわけ？　もしかして、わたしの他にもアリスって子が来てたの？」

「そつだ」

「そつなんだ。——って、え？」

「正確に言つと、お前で千人目のアリスだな」

「……いや、桁数がいまいちピンとこないんだけど……千……？　その子達は今どこに？　あー、ワンダーランドから帰ったのかな」

するとマティはグリムへと視線を投げる。つられて亜莉栖もそちらへ目を向けた。

一度嘆息すると、黒うさぎは真剣な眼差しを亜莉栖へと返し、静かに口を開いた。

「赤の女王のもとだ」

「なんだー元気にやってるんじゃない——ってあれ、赤の女王って、敵、じゃない？」

「まあ、首だけなのが、元氣だと言うのならな」

えっ？　と亜莉栖は聞き返す。いま何を言われたのか、一瞬分からなかった。聞いたくなかった言葉が混じっていた気がする。それは何だったのか……。首……、そう、首だ。

首だけ……その言葉が頭の中を、幾重にも重なって木霊する。

首だけの意味って何だろう？　首だけってことは体が、ない？　体はどこへ、いったんだろう？

呆然自失し立ちつくす亜莉栖の背に、不意に少女の声がかかった。

「はつきり言つてやると、今までにやってきたアリスは、ほとんどがヤツらに殺された。お前がここへ来る前に襲われた、ジャバウォックの影だ。のち、その死体はヤツらによって運ばれ、女王が首を刳る。悪趣味なことに、その首は、あの女の城でコレクションと化

しているそうだ」

「もしかして、わたしも……死ぬ、の？」

「ウチらが守る、とは強く言い切れない。今までのアリスはほとんどが守りきれなかった。そればかりはどうなるか判らない。だが、さつきうさが言っていたように、お前には適正があるかもしれない。『アリス』の適正がな……」

死の恐怖に洗脳されたように思考は硬直し、亜莉栖は少女の言っている意味がまるで理解できなかった。すると柱から離れたグリムが階段を下りていき、恐怖に震える亜莉栖に近寄った。

「ヤツらの血には正気を失わせる効果がある。だが、お前は気を狂わずどころか嘔吐すらしなかった。今までのアリスは狂わされ、踊らされ、そのままヤツらに殺された。その点お前には耐性があるんだろう」

「そして耐性持ちということは、初めて奴らと対等に戦えるアリスを、ウチらが得たと言うことになる」

「戦う……？ このわたしが、あの化物たちと？」

「そうだ。そしてお前は『アリス』になれ」

意味不明なことを言い出すグリムに対し顔をしかめると、亜莉栖は大きく首を横に振った。

「いや、無理無理！ あんなのと戦えだなんて……無理に決まっているわ。てかそもそもわたしは亜莉栖だし、アリスってなによ！」

「アリスはこのワンダーランドの真の統治者の称号だ。そして同時にその者の名でもある」

グリムとマティの言葉に板挟みにされ、ますます思考が追いついてこない。混乱する亜莉栖を余所に、グリムはさらに話を続けた。

「もともとワンダーランドは平和だった、らしい——」

一人目のアリスが当時、幼いながらもワンダーランドを統治したことにより、長らく平和な世界となっていたのだが……。そんなある日、ワンダーランドに異形が誕生することになる。それは人々の負の想念が生み出し、形作ったジャバウォックだった。

それは、中でも嫉妬深く欲深いダイヤの公爵夫人をたぶらかす。そんなある日を境に、気の狂ったダイヤの公爵夫人によりダイヤの王と女王、さらにはハートの女王と王までもが斬殺されるという惨たらしい事件が起きる。

結果、白は壊滅。異形を率いる公爵夫人が赤の女王を名乗り、世界図は赤と黒とに塗り分けられた。

最初に来たアリスは元の世界へと帰ってしまい、その首を刳れなかったことを嘆いた女王は、迷い込む『アリス』の首を執拗に狙うようになった。

以後、もとのワンダーランドを取り戻すべく女王に立ち向かう黒と、アリスの首をコレクションとすることを至高の喜びにしている赤とで、互いに血で血を洗う戦争を始めることになったのだ。

ふう、と小さく息を吐き、黒うさぎは話を切る。

「つまり……もとの平和な世界を取り戻すためには、その公爵夫人を倒さなきゃならないわけ？」

「そういうことだ……」

「……でも待てよ、となるとこの世界は鏡の国が今のメイン……？ いや、デスゲームにトリップ——ってわけでもなさそうだし……、最初の子が統治したってことは、不思議は終わっちゃってるのかな……あつ——」

ぶつぶつと独り言を繰り返し、そこで気づいた一つの可能性。

……もしかして、パラレルワールド？

亜莉栖の動きがピタリと止まる。もうそれ以外の答えが見つからなかった。

来た当初は、こちらへ来る前までやっていた「アリス・イン・デスゲーム」の世界にトリップしてしまったものだと思い込んでいたが、話を聞く限りではそういうわけでもないらしい。

それに所々で設定に食い違いがある。

そして他の二つの話からしてみても、黒うさぎやアンダーテイカーなんてキャラクターは出てこないはず。

途中まで同じ歴史を歩んでいたワンダーランドが、どこかで道を踏み違い話が変わってしまった世界。

亜莉栖は口を開けたままグリムを見て、そしてマティへ視線を移す。

「一体、どうなっちゃうの？」

不安げに呟いた一言は、けれど先ほどまでの恐怖心は徐々に薄れ嬉々としたものを孕んでさえいた。

そんな亜莉栖に対してマティは、くく、と小さく笑い声をもらす。

「大したやつだ。これなら、もしかするともしかするかもしれないぞ？　なあグリム」

視線を投げたその先で、黒うさぎは怪訝そうに顔をしかめていた。何かを危惧しているような、でも心配しているようにも見える複雑な表情。

言葉を返さない黒うさぎから、少女は視線を亜莉栖へと戻す。

「つまりだ、お前は有力なアリス候補なわけだ」

「アリス、候補？」

「そ。森で遭遇したジャバウォックの影、あれ、なんで出来てるか知ってるか？」

聞かれた亜莉栖は当然のように首を横に振った。

「アリスの血液だよ——」

07 アリスの資格

少女の発した言葉に亜莉栖は戸惑う。

たしかに襲われた影は血で形作られていた。霧散して消えた後には血溜まりが出来ていたし、臭いも血液そのものだ。

しかしあれが「アリス」の血で出来ているとはどういうことだろう。混乱冷めやらぬ頭で考えてみるも、まともなものが浮かばない。

「お前、さっきのグリムの話聞いて疑問に思わなかったか？ 首が城にあるのなら、体はどこへいったのか」

その時、ゴクリと音がした。唾を飲み込む音だ。それは亜莉栖の喉元から発せられた音だった。

「本当かどうかは定かじゃないが、アリスの体はジャバウォック本体の餌らしい。本体が食し、そこから影は生まれるんだそうだ」

「あの血液が、アリスのものだっていうのはそういうことなのね」

……

「まあ、チェシャの話によると用途はそれだけじゃないみたいだな」

マティはチラリとグリムを見やる。視線に気づいたのか、黒うさぎは顔をしかめて一瞬睨むと、明後日の方へ視線を飛ばす。

その反応を面白がった少女はケラケラと笑いをこぼした。

二人のやり取りに不思議な顔をしていた亜莉栖だったが、そういえば、と思い出したように口を開く。

「まだ見てないけど、チェシャっているの？」

腹を抱え目に涙を溜めるマティは、笑いながら水滴を拭い亜莉栖の問いに答える。

「くくつ、ああ、いるさ。ワンダーランドでやつを知らないものはいない、なあ、グリム？」

「うるさい、オレにその話を振るな」

なぜか会話に入ろうとしない黒うさぎは、微かに震えている気がした。見れば耳まで真っ赤にし、鋭い犬歯を剥き出しにして怒っている。

「黒の国の住人じゃないのかしら？」

「まさか。やつは女王のペットだぞ？　ここにいるわけがない」

「え？　ならどうしてチエシヤから敵の情報が聞けるのよ」

「それはやつが情報屋だからだよ。それ相応の見返りがあれば口を開く。それに、あいつはペットといっても忠誠を誓ってるわけじゃない。あちらの情報を黒に教えてくれたりもする。だが反面、こちらの情報までリークするから困ったもんだが。恐らく、新しいアリスが来たことも既に女王へ報告済みだろうな」

少女は腕組しながら頭を悩ます。

与えられる情報全てが真実ならいいのだが……。如何せんチエシヤは自由すぎる性質の持ち主だ。その情報には出鱈目なものも多く含まれる。楽しければいい、面白ければいい、ただそれだけの思考の持ち主なのだ。

「てことは、わたし外出たらもう完全に標的なわけね」

「ま、そういうことだな」

がつくりと頂垂れる亜莉栖の表情に、絶望と言う二文字はない。

落胆してはいるものの、別な感情が新たに芽生え始めていた。

「でもわたし、戦えないんだけど……」

「それなら安心しろ。本当かどうか定かじやないが、ジャバウオツクを倒せる剣がこの世界のどこかにあるらしい」

「……それって、ヴォーパルの剣のこと？」

「ほう、そこまで知ってるとは、今回のアリスは博識だな」

マティは機械の左手を打ち鳴らして、感心の拍手を表す。

「それなら話は早い。ウチらの当面の目的は、ヴォーパルを探しながらヤツらの数を減らしていくことだ」

「それで、何が安心なわけ？」

「これもチェシヤがいつか言っていた話だが、ヴォーパルはアリスにしか扱えないらしい。そしてその条件をクリアしていないとそれに触れることすら叶わないという」

「その条件って……」

「狂気、だよ」

マティの言葉に亜莉栖は目を白黒させる。言われたことの意味がまともに頭に入ってこない。文字通りの耳から耳へと、脳を介さずに右から左へ聞き流す。

「なんだその顔は、これは光栄に思うべきだぞ。なんせ有史以来何人たりとも触れることすら叶わなかった、ヴォーパルとやらに選ばれるかもしれない資格を、お前なんか有しているかもしれないんだからな」

「資格？ 資格って、なにが……」

「だから言っただろ？ 狂気だよ、狂気。狂った気質だ」

「狂った……って、わたしが??」

啞然として訊ねると、少女は首を縦に振った。

「どこが？」

「アリスがアリスの血液に中てられない時点で、もう既にお前は狂ってる。アリスじゃない者なら話は別だがね……」

再びマティの視線はグリムへ移った。お前もなにか言ったらどうだ？ そんな意味合いも含んだものだったが、それ以上に意味深な色が見て取れる。しかしその真意に亜莉栖が気づくはずもなく、言葉の意味をようやく理解した彼女は強く首を振り回した。

「わたしは狂ってなんかないわよ、至って普通だわ。ただ、慣れてきたっただけで……」

「それがもう異常なんだよ。自覚はないんだろうけどね」

すると突然、グリムは思いつめたような顔をして亜莉栖に振り向いた。その目付きは相変わらず鋭いままだ。なにか言いたげに口が一瞬動いたが、そこから声が漏れることはなかった。

「さて、話も一通り終わったことだし、そろそろ解散するか」

そう言って一度手を叩くと帽子の少女は歩き出す。

「あの、ちょ、ちょっと……」

だが亜莉栖はそれを呼び止めた。ん？ と怠慢そうに見返すのは他でもない帽子の少女。

「まだ何かあるのか？」

「いや、あなたたちのこと、まだよく知らないんだけど」
「そんなものはここにいれば自ずと分かるだろ、じゃあな」

さも面倒臭そうに言葉を返すと、長いロープを引き摺りながらマティは階段を下りていく。どうやら謁見の間から出て行くようだ。しかし扉の脇で頭を下げるメイド長の横までやって来ると、くると振り返り声を発した。

「ああそつだ、アリス、後でウチの工房に來い。ヴォーパルがここに在るかまだ分らんからな。とりあえず繋ぎの為の武器をくれてやる、絶対に來いよ、遅れたらミンチだからな！」

「え、あ、うん。いや、時間——」

何時に行けばいいのか聞こうとした亜莉栖の言葉に耳を傾けることもなく、それだけを一方的に残すと、マティはメイド長によって開けられた扉から小さな歩幅で足早に出ていった。

「時間……は？　つて、わたしミンチ？」

グリムに振り返り亜莉栖は訊ねると、知らん、そう言って黒うさぎはため息を吐いた。

少しの沈黙が場に流れる。

空気は徐々に重たくなっていき、けれどある人物の呟きによりそれは打ち砕かれた。

「アリスちゃん、はあ、はあ……」

瞬時に顔を引き攣らせ、最大級の嫌悪感を顔にする亜莉栖。玉座に振り返ると、鼻息荒く、公爵がなにやらカメラのようなものを連写しているのが見えた。

「な、なにしてんの、あれ？」

「見ての通りお前を撮ってる。アリスを愛でるのが公爵の趣味なんだ。放っておけ、あれがあいつの楽しみだからな」

「さっきマテイが言ってたのって、あれだったのね……。いや、てか撮られてるわたしの気にもなってるよ」

「じき慣れるさ」

慣れたくないんだけど、と身の危険を感じ身震いしながら呟く亜莉栖に、メイド長も共に不快感を顔にしていることは気付く由もなかった。

一度肩を竦めると、黒うさぎはそっと近づき亜莉栖に耳打ちする。

「マテイの用事が済んだら、あとでオレの部屋に來い。話がある……」

「え……？」

甘美な響きが直接脳内を愛撫する。

……身の危険はすぐ近くにも？！

ゾワゾワとした悪寒にも似た寒気に身を震わすと、亜莉栖は一瞬で耳まで真っ赤にし、光の速さでグリムから飛び退いた。自身の体を抱きしめてイヤイヤを繰り返す亜莉栖を尻目に、黒いうさ耳は扉へと徐々に遠のいていく。

メイド長になにか話しているようだが、それは亜莉栖の元まで届かない。すると出ていくグリムの背に礼をして、メイド長は亜莉栖の方へと歩いてきた。その顔に満面の笑みを貼り付けて。

「ヒッ?!」

先ほど身体を散々玩ばれたのを思い出したのか、完全に怯える亜

莉栖はにじり寄るメイド長から後退る。

「アリス様、マティ様がお待ちですので、早く参りましょう」

鼻にかかるような甘い声を出しながら、十メートルほどの距離を一瞬で詰めたメイド長。亜莉栖の腕をがっしりと掴むと、涙目の亜莉栖にお構いなしに謁見の間から連れ去った。

「あ……」

そうして謁見の間に一人取り残された強面のオヤジ。愛でる対象である亜莉栖がいなくなったことにより、凜々しい顔つきに戻る。
しかし――

「うつ……うつ……」

俯き肩を震わせる公爵は次第に涙声になると、「アリスちゃん
！！」と大声を上げてとうとう泣き出した。

瞬間、柱の影から現れたのは複数人のメイドさんだ。耳には用意のいいことに耳栓が装着されている。

各々役割があるのか、ある者は公爵をあやし、ある者はカメラを取り上げ、そしてある者は――。ドンッ、と鋭い手刀をその後頭部にかまし、公爵を気絶させると面倒臭そうに肩に担ぐ。

「あーあ、またやっちゃったわね」

「仕方ないでしょ？ まったく、いい年こいたオヤジが女々しい……」

……

「後が大変なんだから……また記憶失うのよ？」

「分かってるけど……」

互いに文句を言いながらも、メイドたちは公爵の体を支えて出口へ向かう。それは玉座の後方にあるもう一つの扉だった。

見事な連係プレイにより気絶させられた公爵は、謁見の間からの退場を余儀なくされる。今までの記憶を一時的に失って、また亜莉栖が来た事から教えられることになるとは、眠る彼には思いもよらないことだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2736y/>

Alice of Black Blood

2011年11月24日21時46分発行